西三条第跡出土の遺物 6
土師器・黒色土器

http://www.kyoto-arc.or.jp
（公財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

土師器　9 世紀後半に属する池から出土した土器の 9 割以上を占めるのが土師器と呼ばれる素焼きの器です。壊れやすいため大量に作られ、大量に消費されました。中でも多いのが皿と杯です。細部を観察してみましょう。

重ね焼き痕跡（写真 1）　裏側には色の違いが観察でき、重ね焼きの痕跡と考えられます。低火度焼成ですが、色が赤い部分は火が当たり、白い部分は重なっていたため低温になったといえます。

粘土継目（写真 2）　粘土板から大まかな形を作っていきますが、その際の粘土境目が観察できる個体が稀にみられます。継目を消す作業が十分行なわれなかったのでしょう。

ナデの止まり（写真 3・4）　口縁を指ではさみながら時計回りにナデて調整しますが、小刻みに行なうため、止まった時の痕跡が器に残されます。口縁部・体部に指先や爪の痕跡が見られるのも、口縁部を調整した際についたとみられます。

ナデの引き上げ（写真 5）　口縁のナデ調整は右手をサッと引き上げて終了します。その際の痕跡が内面側で観察できます。

底部内面のハケメ（写真 6）　大半の個体は底部内面にハケメ状の痕跡が確認でき、ハケ（板の小口）で調整した後ナデたことがわかります。

口縁端部の窪み（写真 7）　口縁の先端が窪み、凹線を施したように見える個体が稀に観察されます。端部を指で調整する際、上と下を強くナデたので、結果的に中央が窪んだのでしょう。

杯 B 外面のヘラケズリ（写真 8）　体部が大型で底部に高台を貼り付けた杯を杯 B と呼びます。平城京から継続する器形で、本来は蓋がのりますが、平安京に入るとやがて蓋は消え、外面の調整もヘラミガキが省略されてヘラケズリのみとなります。器壁の歪みが大きい個体はヘラケズリだけでは平坦にならず、連続する窪みが横方向に残されます。

杯 B 底部高台の退化（写真 9）　杯 B の変化は高台の形状にも顕著に現れます。高台は当初、台形のしっかりした作りで、周囲も丁寧にナデますが、次第に低く不安定な形状となり、やがて消失していきます。

高杯杯部外面のヘラケズリ（写真10）　高杯は食品を盛りつけるための器で、浅く広がる杯部、真っ直ぐ延びる脚部、小さめの裾部からなります。杯部は端部をナデた後、外側から中心に向かってヘラケズリを施します。方向は、器面に残る砂粒の動きから判定できます。

高杯杯部の粘土継目（写真11）　杯部の先端は粘土紐を継ぎ足し成形しますが、成形が雑な個体では継目が観察でき、継目で破損する場合も見られます。

高杯脚部のヘラケズリ（写真12）　ヘラで多角形に面取りし形状を整えます。ケズる方向はすべて下から上です。9世紀初め頃は断面7角形が多くみられますが、今回は8角形と、それより面数の多いものが含まれます。

高杯脚部内面（写真13）　棒状のものを回転させて形状を整えますが、稀に穴の中が窪がる個体が見られます。杯部を接合する時に充填した粘土が押し出されたものかも知れません。

黒色土器　器表に炭素を吸着させて黒色に仕上げた器です。9世紀代は内面だけが黒色のA類が中心となります。椀・甕・鉢があります。10世紀になると内面・外面が黒色のB類が主体をなし、11世紀中頃から瓦器に変化します。

椀内面のヘラミガキ・暗文（写真14）　内面の器面調整は底部を一定方向にヘラミガキし、体部はヘラを回してミガキます。底部や体部には螺旋形の文様（暗文）を描きます。

7

8

9

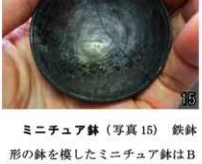
10

11

12

13

14


15

16

ミニチュア鉢（写真15）　鉄鉢形の鉢を模したミニチュア鉢はB類に属し、内面のヘラミガキは特に丁寧で銀色の輝きを放ちます。

小型壺（写真16）　出土例の少ない器形でB類に属します。外面は丁寧にヘラミガキし、高級感をうかがわせます。そのうちの1つには木片が残されており、先端を尖らせることからこれを爪楊枝とみると、この壺はその容器ということになります。　（丸川義広）